

解題

王曉葵「中国における『民俗学』の発見」

施 堯

SHI Yao

本稿は2016年に華東師範大学の紀要である『華東師範大学学报（哲社版）』2016年第4期に掲載された王曉葵「中国“民俗学”的发现：一个概念史的探求」の翻訳である。前号に掲載した王氏の「『風俗』概念的近代嬗変」の続編としても位置づけられる。

前号でも王曉葵氏の略歴を紹介したが、南京大学で中文学を修めたあと、名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程終了後、同大学院で『西村茂樹における伝統と近代』で博士号(学術)を取得。上海の華東師範大学社会発展学院民俗学研究所・教授、所長を経て、2018年8月からは深圳にある南方科技大学社会科学高等研究院・教授に移って、現在に至っている。主たる研究テーマは、災害研究を基軸にした民俗学的、歴史社会学的な記憶論であるが、このほか日中の民俗学史にも詳しく、本稿は中国の民俗学史に関する基礎的研究に該当する。

主要著書として『民俗学と現代生活』（上海文芸出版社、2011年12月）があるほか、『現代日本民俗学の理論と方法』（共編、学苑出版社、2010年10月）、『記録と記憶の比較文化史』（共著、名古屋大学出版会、2005年2月）『近代日本の歴史意識』（共著、吉川弘文館、2018年3月）、『記憶の共有をめざして』（共著、行路社、2015年9月）、『東アジアのクリエイティブ産業—文化のポリテクス』』（共著、2015年7月、森話社）などがある。

本稿を翻訳する意義は、いうまでもなく、中国において「民俗学」が、一つの学問領域としていかにして誕生していったのか、中国の学術分類体系において、どのように「民俗学」が定着したのか、丁寧に追跡されている点にある。20世紀初頭のアメリカにおける華人排斥に対する抗議運動の中で芽生えていった、出身地を超えた「郷土意識」すなわち「中国人」意識が、どのようなプロセスを経て形成されていったか、またそこに民俗学はいかに関わったのかが問い掛けられている。

ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』を引きながら、一人の中国人が無数の同胞と同じ春節を祝い、同じ粽を食べることを想像するには、胡朴安のような、中国各地の多種多様な「民俗」を同一の時空の中で、読者に見せるような媒介が必要だったことが説かれていく。

中国における言文一致運動であった白話文学運動や、北京大学において1918年から始まる歌謡収集運動を見据えつつも、王氏が着目するのは、1922年に設立された北京大学の研究所の国学門の構成である。胡適らの活躍によって、国学門における細目（一種の講座）は、方言研究会・風俗調査会・考古学会・明清史料整理会・歌謡研究会の5部門となったが、うち3つが民俗学と関連する組織であったこと、またその機関誌であった『国学門週刊』や『国学門月刊』においても民俗学の比重の高かったことが明らかにされる。

その一方で、当時から民俗学の「苦境」が論じられていたことにも注目し、民俗学は「副業」に墮

しやすいこと、またデータの収集と整理だけに追われやすいことが指摘されていたと主張する。王氏は元の問題意識を見失うと、現在においても、その弱点が露出するのだと説いているようであり、学史を原初から問うことは、意義あることだと唱えているといえる。

前号掲載の王論文では、1923年の北京大学の風俗調査会の設立をめぐる練り広げられた「風俗」か「民俗」かの論争を導入として、「風俗」概念の変遷を手掛かりに、風俗とfolkloreの差異がもたらしたその後の展開が追究されている。漢字文化圏における「風俗」概念とfolkloreあるいは「民俗」との相違や、さらには「民俗学」の交渉と葛藤が扱われており、本論文と合わせ読むことは、東アジアの「民俗学」を根本から問うことに繋がる。